

## 絵引き式蔵書印索引の試み

たとえば、ここに一冊の本があり、巻頭に蔵書印の押捺があったとする。この印について知りたいとき、その調べかたにはさまざまな方法が考えられるであろう。

まず、蔵書印の印文が読める場合は、簡単である。小野則秋氏「日本の蔵書印」(昭二九 芸文社/昭五一 臨川書店)、あるいは拙考「蔵書印提要」(昭六〇 青袋堂書店)に依ることができる。また、印文が判読できない場合でも、だれの印かが分かる場合、上記の二著が検索の便となる。

もし、印文も読めず、使用者名も分からない場合はどうすべきか。蔵書印について調べる必要が生じるのは、現実にはこのケースが、圧倒的に多いはずである。が、この場合の効率的な検索法はまだ存在しない。現状では、蔵書印譜の類をひもとき、最初からページを繰っていくしかない。

この不便を解消する手だてはないものであろうか。

島 原 泰 雄  
渡 辺 守 邦

印文も使用者名も分からない蔵書印検索のための方法として、二種類の索引が想定できるであろう。第一は、へ一字索引である。たとえば、ある蔵書印が全文を判読できず、かろうじて「□□意文庫」とだけ読めた、とする。ここから使用者が誰かを知り、不明の二字をも明らかにしようとするものである。そのためには、「意」の文字を含む印文を集めて、第一字目に来るも、第二字目に来るもの……と配列しておき、それと照合すればよい。つまり、全蔵書印の印文を、一字づつに分ち、総索引を作るのである。へ一字索引は理論的には簡単である。また「法華經一字索引」のごとき先蹤もある。労力を費やすだけで、実現が可能である。ただ、ぶ厚い冊子になって、いささか扱いにくいものになることを覚悟せねばならないだろう。むしろこの種の作業は、機械(コンピュータ)に処理を委ねるのがよい。検索もまた簡単であろう。つまり、へ一字索引は簡単に実現しそうだが、携帯の便においていささか問題を残すようである。加えて、印文の正しい読みを探し当てたとしても、

印の形状が一致するかどうかわからないものどかしさは残る。

〈一字索引〉に限らず〈印文索引〉〈使用者名索引〉はいずれも、印文と使用者名との間を明らかにするが、印影を直接照合できない点に、不便があった。その欠を、次の第二の索引が解消するであろう。

第二は、印影を図形としてのみ扱い、形状によって検索する〈絵引き索引〉である。この〈絵引き索引〉については、以下に章を改めて、一つの試案を提示してみたいと思う。そのまえに告白しておかねばならないことがある。図形の諸要素のみによって蔵書印を検索する、かかる発想は奈辺に生まれたものか、についてである。それは印文が読める、読めないに関わりなく利用できる索引を求めている、つまり編者たち自身の、印文判読力の不足を補おうとする〈あがき〉の、所産であった。

### 〈絵引き索引〉の理論

〈絵引き索引〉は、印影の形状によって分類、配列するのであるが、形状をできるだけ重層的に分類しておくことによって、検索が便利になるであろう。ところで、蔵書印において、形状の諸要素を、はたしてどれだけ摘出することができるであろうか。この点に関して、先学の研究成果に学ぶことにしよう。

前掲『日本の蔵書印』に「蔵書印の形態と書体」と題した一章がある。ここにおいて小野氏は、〈形態〉〈輪郭〉〈篆刻形式〉について、次のような分析を示された。

### ○形態

#### 周辺直線系統のもの

- 一、正方形
- 二、矩形
- 三、長方形
- 四、短冊形
- 五、菱形
- 六、多角形

#### 周辺曲線系統のもの

- 七、円形
- 八、楕円形
- 九、不規則円形

#### 周辺の線不規則のもの

- 一〇、象形
- 一一、文字

### ○輪郭

- 一、単郭（細枠／厚枠）
  - 二、重郭（二重枠／子持枠）
  - 三、図案郭（象形枠／線枠）
  - 四、無郭
- イ、角の丸味おびたもの  
ロ、角の尖ったもの

## ○篆刻上の形式

- 一、陰 文 体 (朱字)
- 二、陽 文 体 (白字)
- 三、陰陽文混合体 (朱白相刻法)

この三要素は、たとえば、〈形態〉の(二)―(四)が現実には判別の困難である点などに、少し修正を加えることによって、ほぼそのまま借用できるであろう。ただし、これだけでは、区分けが粗すぎるもののようにあつて、もう少し分類の要素の加わることが望ましい。他に図形としての蔵書印の構成要素として考えられるものはなにか、と捜してみるとき、文字のあつたことに気づく。文字は読めないことを前提にしていたのであるから、図形の一部とみなすことにする。そうするとき、〈字数〉と〈行数〉の二種を、図形の構成要素として追加することができ。

五つの構成要素とそれぞれ下位分類について、次に説明してみることしよう。

## 分類の基準

五つの構成要素に、次のような順位を与える。Ⅰ篆刻上の形式、Ⅱ印影の形態、Ⅲ輪郭、Ⅳ行数、Ⅴ字数である。まず陰刻、陽刻の区別を行ったのち、ほぼ印影の外形から内側に向かう、という順序にしてみた。

なお、この他に、印影の色すなわち肉色による区分も可能であろうが、採用しない。朱が圧倒的に多いことと、同じ印を肉色を違えて捺すことも少なくないところから、である。印色は、「和学講談所」印の朱墨二押のごとく、特別な意味を持つこともあつて無視できないが(その意味については「内閣文庫蔵書印譜」を参照されたい)、どの程度他の例に当てはめるものかは不明、ゆえに割愛することにした。

次にⅠ―Ⅴそれぞれについて、順を追って説明してみる。

### Ⅰ篆刻上の形式(10000代)

#### 0 陰 刻 体 (白字)

#### 1 陽 刻 体 (朱字)

#### 2 陰陽刻混合体(朱白相刻法)

下位分類は右のごとくである。「日本の蔵書印」の分類に、そのまま依ることとした。

ただし同書では、朱字を陰文体、白字を陽文体として、一見逆であるから注意を要する。捺された印影の文字が白抜きになるものを陽文とされるが、これは印章の始原における用法、つまり粘土に押印したときの文字の状態に即した名称、という。いま、混乱を恐れて、〈陰文〉、〈陽文〉の名称を排し、あえて通俗的な〈陰刻〉、〈陽刻〉を採用した。

### Ⅱ印影の形態(10000代)

0 (陽刻無郭印)

1 正方形

2 長方形

3 円形

4 楕円形

5 その他(圖案郭を含む)

【日本の藏書印】をもとに大胆に簡素化した。

陽刻無郭の印は、印影からはその形状を明らかにすることができない。それゆえ、匡郭の有無は本来は形態の範疇外であるが、便宜ここに置くことにした。

【日本の藏書印】に矩形、長方形、短冊形の三類を立てることは先に言った。これをすべてへ2 長方形に納めることにした。

長方形には、縦長、横長があるが、それも併せてここに納める。ただし、配列に当って、それぞれは別に集めておくべきであろう。(これを「配列による分類」と称する)。へ4 楕円形の場合も同様である。

へ5 その他には、分銅形、瓢形、竹根形、菱形、多角形などを想定した。いずれも絶対数が多くないと思われるので、一項にまとめることとした。この内、菱形は正方形との区分が問題になることもあろう。その場合、強いて決着を付けず、二重に登録する。これは他の場合も同様であって、区分に疑問の残るときは、登録を複数にすることを原則(これを「複数登録の原則」と称する)としたい。

〈圖案郭〉とは、抽象あるいは具象の圖案を用いて匡郭に代えるもの

のこと。長方形あるいは円形とみなしうる場合もあるが、それらを含めて一切をここにまとめておくのが無難であろう。

正方形、長方形で、四隅が丸味を帯びたり、飾りを持つものがあるが、それら角の小さな変形は無視するものとする。

III 輪郭(100代)

0 無郭(陰刻、陰陽刻体を含む)

1 単郭

2 双郭

3 圖案郭

4 その他

輪郭は、文字どおり外側の匡郭だけを考え、印影内の野(界線)は無視するものとする。

へ2 双郭には、二重枠と子持枠があるが、その区別もしない。

IV 行数(10代)

0 絵印(草体神代文字を含む)

1-7 行数

8 八行以上

9 その他(行数を数えられないもの 縦・横行を交えるもの)

「1」7 行数とは、七行までのそれぞれの行数を意味する。

横一行の場合、各字一行として数える。

横二行以上の場合、「9 その他」に属するものとする。

# V 字数 (1代)

0 絵のみのもの

1 7 字数

8 八字以上

9 その他 (字数を数えられないもの 外国文字を交えるもの)

の

絵 (符号、模様などを含む) を交える場合、文字のみを数えるものとする。

## 〈絵引き式索引〉の実際

いままで述べてきたところにしたがって、実際に分類を行ってみることにしよう。〔例1〕は金沢文庫の印である。まずこの印を分析して、



〔例1〕

五つの構成要素を調べでみる。そうすると

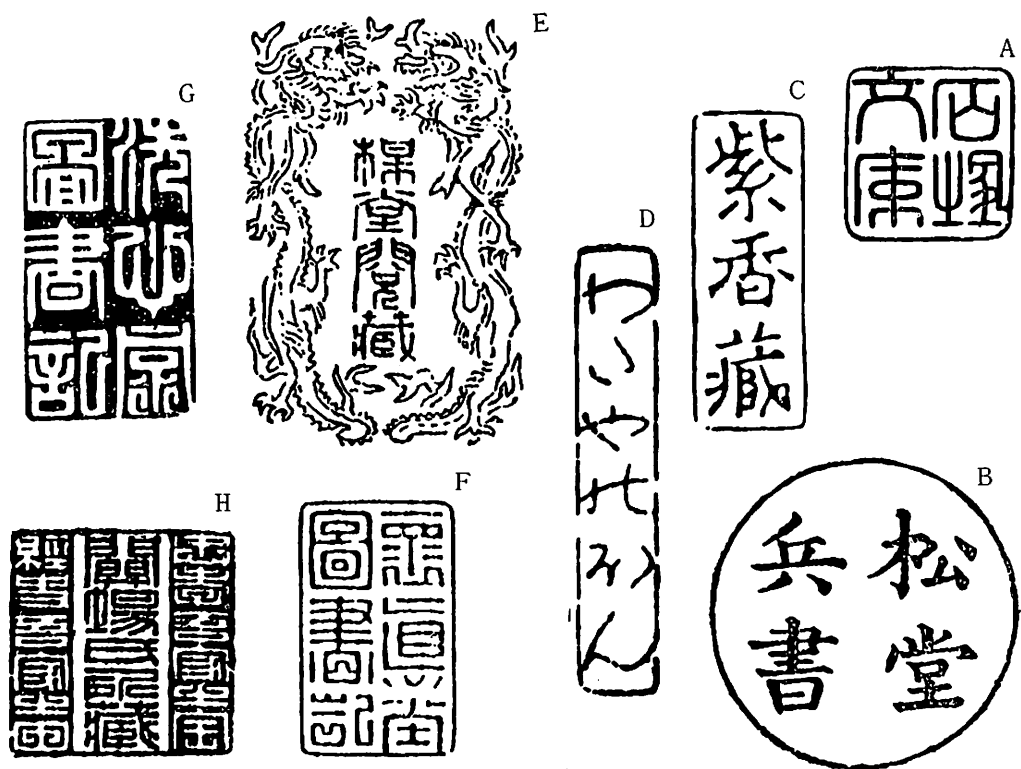
I 篆刻上の形式	1	陽刻体	1 0 0 0 0
II 印影の形態	2	長方形	2 0 0 0
III 輪郭	1	単郭	1 0 0
IV 行数	1	一行	1 0
V 字数	4	四字	4

ということになる。「金沢文庫」印は陽刻体で長方形、単郭、一行四字の印という分析結果が出た。この結果を、それぞれの下位分類に付いた洋数字を用いて「12114」と表わすことができる。

もうすこし他の例についても調べてみよう。〔例2〕は『日本の蔵書印』の「蔵書印の形態と書体」の章に図版で載せられた、様式を異にする印影である。この場合の格好の例と思われるので、利用させていたいくことにしたい。

先の「金沢文庫」印の例にならって、それぞれを分析した結果の数字だけを示してみる。

A	1 1 1 2 4	「石塚文庫」(石塚豊芥子)
B	1 3 1 2 4	「松堂兵書」(間部勝詮)
C	1 2 1 1 3	「紫香蔵」(大久保紫香)
D	1 2 1 1 6	「わたやのほん」(天理図書館)
E	1 5 3 1 4	「樸堂閔蔵」(浅野長祚)



〔例 2〕

F 1 2 1 2 6 ..... 「懷惠堂圖書記」(中井竹山)  
 G 0 2 0 2 6 ..... 「洗心堂圖書記」(大塩中齋)  
 H 2 1 0 3 8 ..... 「関場氏所藏忠孝吾家之宝経史吾家之田」  
 (関場忠武)

Hの関場忠武印は陰陽刻混合体の例である。この場合、「田輪郭」を陰刻に準じてへ0 無郭に定めたが、或はへ1 単郭とすることもできるかもしれない。そうすると「2 1 1 3 8」になる。「複数登録の原則」を適用し、両者併記しておくことによって、検索に便が増すであろう。

かくして蔵書印を五桁の数字によって表わすことができるようになった。この数字にしたがって印影を並べ、印文の解読と使用者名との添えることにより、蔵書印の〈絵引き索引〉ができる。

ただし、ここで、すぐさま〈絵引き索引〉の作成に取り掛かるわけにはいかない。その前に、少なくとも次の二点を確かめておく必要がある。第一は、この方式によって、すべての印影の数字化が可能か、ということであり、第二は、この数字が適度な分布を示すか、である。一個所に固まることなく、適当に分散しなければ、検索に不便を生じる。そのために、どのような配列を呈するかを、サンプルを用いて確かめておくことにする。

サンプルとして朝倉治彦氏「蔵書名印譜」(昭52 臨川書店)所収金三三八印を採ってみる。ただし、「複数登録の原則」を採用したので三

[別表]

分 類	「蔵書名印譜」 所収ページ	%
01011	29	0.3
01012	83	0.3
01022	53, 93, 132	0.9
01023	97	0.3
01024	3, 15, 17, 31, 55(2種), 60, 69, 78, 126, 129	3.1
01036	16, 188, 191	0.9
01038	188	0.3
02012	45, 47, 66, 156, 197	1.4
02013	14, 17	0.5
02024	54, 143	0.5
02026	56, 83, 132	0.9
02113	14	0.3
03012	45	0.3
04015	8	0.3
05012	124	0.3
10000	155	0.3
10011	38	0.3
10024	62	0.3
10098	33	0.3
11012	197	0.3
11100	75	0.3
11111	179	0.3
11112	179	0.3
11122	8, 55, 69, 78, 93(2種), 121, 133, 134, 154, 160, 185	3.3
11123	57, 86, 114, 138, 179	1.4
11124	6, 14, 20, 20, 22, 28, 60, 61, 62, 68, 78, 80, 82, 92, 101, 108, 109, 112, 113, 125, 128, 132, 139, 140, 143, 145, 151, 154, 156, 170, 174, 187	8.6
11126	10, 22, 29, 39, 203, 204	1.7
11135	44, 50, 87, 184	1.1
11136	3, 59, 72, 147, 188	1.4
11138	13, 19, 31, 37, 44, 51, 98,	1.9
11139	98	0.3
11148	190	0.3
11199	75, 180	0.5
11222	114, 177	0.5
11224	119, 137	0.5
11324	99	0.3
12111	61	0.3

分 類	「蔵書名印譜」 所収ページ	%
12112	120, 128, 156, 181, 197	1.4
12113	11, 34, 40, 43, 58, 59, 110, 128, 142, 151, 160, 169, 181, 182, 192, 197, 207	4.7
12114	1, 12, 15, 30, 38, 41, 45, 48, 64, 70, 104, 117, 122, 126, 127, 144, 161, 197, 201, 202	5.7
12115	2, 16, 21, 28, 29, 32, 47, 57, 86, 90, 95, 139, 141, 152(2種), 167, 178, 206	5.0
12116	133	0.3
12122	157	0.3
12124	51, 59, 61, 68, 76, 94, 109, 132(2種), 145, 197	3.1
12125	7, 65, 76, 107, 141	1.4
12126	25, 35, 36, 49, 51, 74, 84, 103, 105, 106, 112, 115(2種), 123, 129, 143, 146, 157, 165, 175, 192, 196, 200	6.4
12127	97, 153	0.5
12128	55, 73, 75, 82, 97, 103, 116, 118, 121, 131, 143, 161, 171, 176(2種), 180, 198	4.7
12138	23, 75, 85, 197	1.1
12148	96, 146	0.5
12158	79, 102	0.5
12198	157	0.3
12213	88(2種), 110	0.9
12214	27, 42, 47, 71, 91, 166	1.7
12215	25, 37, 42, 57, 66, 100, 188, 193	2.2
12216	27	0.3
12224	34	0.3
12226	67, 129, 205	0.9
12228	38, 63, 81	0.9

分 類	「蔵書名印譜」 所収ページ	%
12428	176	0.3
13100	122	0.3
13110	75	0.3
13112	158	0.3
13113	52	0.3
13122	51	0.3
13123	66	0.3
13124	40, 48	0.5
13199	75, 89	0.5
13213	194	0.3
13228	162	0.3
13299	199	0.3
14100	149	0.3
14112	73, 77	0.5
14113	9, 162	0.5
14114	2, 15, 150, 164	1.1
14115	29, 71	0.5
14122	110, 148, 157	0.9
14125	88	0.3
14199	148	0.3
14126	126, 135	0.5
15011	38	0.3
15100	149	0.3
15112	41	0.3
15113	92, 119, 185, 195	1.1
15122	144, 156	0.5
15124	111, 163, 173	0.9
15128	121	0.3
15212	71	0.3
15213	88, 154	0.5
15238	162	0.3
15298	186	0.3
15300	155	0.3
15311	189	0.3
15312	182	0.3
15313	4, 185	0.5
15314	19, 136	0.5
15315	5, 168	0.5
15333	158, 186	0.5
15338	162	0.3
15344	182	0.3
15398	183	0.3
15412	124	0.3
15413	52	0.3
21038	24	0.3
21138	24	0.3
22012	177	0.3
22097	61	0.3
22112	177	0.3
22497	61	0.3
23022	159, 160	0.5
23122	159, 160	0.5
33012	122	0.3
24012	159	0.3
24112	159	0.3

五八に項目の数が増えている。その結果は、別表に示したごとくである。別表は、左から順に、分類・『蔵書名印譜』の当該印影所収ページ・全体に占める割合（パーセント）を示す。まず第一に、数値化不可能な印はなかった。第二には、数字の分布であるが、数値の高い順に並べてみると、次のようになる。

〔1 1 1 2 4〕	八・六パーセント
〔1 2 1 2 6〕	六・四
〔1 2 1 1 4〕	五・七
〔1 2 1 1 5〕	五・〇
〔1 2 1 1 3〕	四・七
〔1 2 1 2 8〕	四・七

この合計は35・1パーセントであって、この六項だけで全体の三分の一に達する。ちなみに、平均を50としたときの〔1 1 1 2 4〕の偏差値は56・2であった。

このような分布が実用に耐えるものであるか否かは、論議の別れるところであろう。そこで、実際にこの方式を応用してみた結果を提示して、参考に供することにしたい。つまり、ささやかなものながら、蔵書印の〈絵引き索引〉の実例である。

図版として後掲したものは、『蔵書印提要』巻頭の別刷から採った印影を、上述の数字五桁の分類法によって配列してみたものである。掲出

印影数は、『複数登録の原則』に従った重複を含めて二六三、それぞれの印に、使用者名及び印文を添えた。ただし、解説の必要を認めない印については、煩雑を厭って印文を略した。

最後に、数字五桁による分類法の諸問題について、あるいは〈絵引き索引〉の有効性等を、編者二人の対談により論じ、もって「まとめ」に代えた。いささか型破りな形式になってしまったことお詫びするとともに、〈絵引き索引〉という試みに対する御意見、御批判を、ここに冀うものである。

## まとめ

Q この〈絵引き索引〉は、まず私が独断的に考案し、次に、実際に分類したり、印影を配列したりを貴兄にやってもらう、という行き方をした。つまり、分担というか分業の体制をとって、この考案がはたして実用的か、あるいは有効かを測ってみたわけだが、その二人の対談で、まとめをつけてみるのも、意義があることではないかと思う。そこで質問してみたのだが、使い勝手については、後回しにして、ずばり第一問、分類するまえに、どの形の印が数の上で多いと予想したろう。

A どの形かというと。

Q 丸とか正方形とかだけではなく、何行、何字までを含めて。つまり、われわれの数字五桁の表示法で。



A はじめの予想と今から言われても困るんだけど、しいて言えば、

「金沢文庫」型、つまり、陽刻・長方形・単郭・一行四字の「12114」だね、これがトップでなかったのは、やはり意外だった。

Q もう一つ、双郭の「122214」という印もあるけど、こっちはベ  
スト・スリーにも入らなかった。「金沢文庫」印といえは、なんてい  
っても蔵書印の王様、したがって人気抜群で模倣されることも多かつ  
たろう、という予想だったわけね。

A シンプルでありながら、雅致を持っている。

Q けっきょく「11124」型がトップだった。「蔵書名印譜」の数  
字で八・六パーセントという結果が出た。この結果に問題がないだろ  
うか。八・六パーセントというと、たとえば、全部で五千箇の印影を  
集めたとすると、四、五百の印が一箇所に集まることになる。

A たしかにそうだ。けれども、それは一種の数字の魔術というか机上  
の空論に基づく心配なんであって、実際に印影を配列してみた体験を  
もとに言わせてもらえば、考えすぎだと思う。

Q なぜ。

A 第一に言えるのは、「11124」型というのは、印影の形態が  
「1 正方形」であること。つまり、一ページの中に他のページにく  
らべて、数多くの印影を詰めこむことが出来る。

Q 数が多い事は、それだけ捜しにくいことにはならないの。

A それが実は逆なんだな。それだけ、一覧性を備えているということ  
になる。同じ印影数であっても、例えば、他の形の印だったら七ペー

ジ繰ってみななければならないのに、五ページで済ますことができるっ  
てわけ。

Q うん、なるほど。

A それに、これは「11124」型に限ることなく一般的にそうなの  
だが、数の多さの問題は、たとえば、配列を大きさの順にすることに  
よって、ある程度は解決できる、これが第二に言えることだろう。

Q その通り。マニュアルすなわち五桁の数字化の説明の中で「配列に  
よる分類」ということを言ったのは、実はこのことだったんだ。

A 伏線が張ってあったのか。「配列による分類」はそれとして、もう  
一つの「複数登録の原則」とやらの、実際に貼ってみる作業に当った  
人間として、いささか異議がある。もっとも、陰陽刻混合体の輪郭に  
関してだけなんだが。先に関場忠武印を、無郭、単郭両方で複数登録  
したらしい云々の発言があった。そこで聞きたい、この印影は、どう  
いう数字とどういう数字になるのか。

Q たしか、無郭として「21038」、単郭なら「21138」だっ  
たはずだ。

A さらに聞きたい、その二つは、どの程度ページが離れると思うか。

Q まあ、あんまり離れないことは確かだ。

A あんまりどころじゃない。実は、ほとんど隣り合って並ぶんだ。な  
ぜかといえば、20000代、つまり陰陽刻混合体などというものは、  
めったにお目にかかるもんじゃないからね。数字を比べただけでは、  
差が有りそうに見えるが、そこに落とし穴があった。

Q 話題を変えよう。いささか意地悪な質問を。『蔵書印提要』の印で分類不可能というものは、あったの、なかったの。

A まるつきり他人事のような無責任発言だ。まあ、それはそれとして、お生憎さまだが、一つだけあった。

Q 具体的に言おうと。

A 一応「13194」に分類しておいた高野辰之氏の丸い印。あれは「高蔵書」と読めば、すつきり円形印として収まっちゃうんだが、そうはいかない。「高」の字が下に延び、そのまま文字のまわりをぐるりと一回りして、「の」の字を描いている。つまり「高蔵書」じゃなくて、これで「高の蔵書」と読ませるつもりなのだ。この場合をどう処理すべきか、マニュアルには書いてなかった。

Q なるほど。では、どうしたらいいだろう。「複数登録の原則」で処理できないだろうか。

A 「複数登録の原則」を適用すると、「の」の字を輪郭とみなすことになって、「13123」の場所に配置することになる。その場合の欠点は、「高蔵書」という間違った読みを容認することになる。

Q それも困る。なにか名案は。

A それを考えるのが考案者の役目だろ。たとえば、この類に「9999」の番号を与え、一括して最後に集めるとか。

Q まるでテレビ・アニメだ。いや、これは独り言。それも一案だが、安易に認めると、乱用の恐れなきにしもあらず、だな。幸い今回ののは、他に類例もなさそうな、ごく例外的なケースのようだから、もう少し

考えさせてもらうことにして、預りということにしていたらこう。ここでまた話題を変えて、使い勝手のことに移りたいのだが、数字を使うということでは抵抗はなかったらうか。よこ文字と数字が、われわれ国文学の人間には、とかく苦手なんだが。

A 数字化って聞いて、はじめは機械化つまりコンピュータにのせるつもりなのかと警戒したけど、そんな気もなさそうだと、だんだん分かって来た。そんな気なかったんじゃない。

Q うん、まあね。ところで、それぞれの分類の使い勝手については。

A その質問、答えとして何を期待しているか、何を言わせたいのかが見え見えだよ。それでも、あえて言わせるの。

Q 是非どうぞ。

A 分類の一つひとつの数字に意味を持たせてある、と答えればいいんだらう。

Q いや、血の通った数字、と言ってほしかった。数字に意味を持たせてあるって、つまりどういうこと。

A まだ言わせるつもりだ。まあいいだろう、申し上げましょ。すなわち、陰、陽刻の別で陰刻を0、陽刻を1に当てたのは、陰の数、陽の数という東洋の思考に即し、単、双郭もそれぞれの字の字訓、つまり単はヒトツ、双はフタツという訓にしたがって単郭に1、双郭に2を当て、行数、字数もそのままを数字にすればいいようにしてある、こういう答えでよろしかったでしょうか、せんせい。

Q だいたい、よろしい。

A 印形を数字化するとき、初めはマニュアルと首っ引きで、こんな面倒くさいこと考えやがってと、ぶつぶつ言いながらやってたけど、あの時点で、はたと気づいたね。隠し味発見、というのがその時の感想だった。

Q つまり、数字に怖じけづくにおよばず、何はともあれトライしてみるに価する、と言っているかな。

A すぐ調子にのる。ただ、慣れるとそれほど厄介でない、とまでは言えるか。

Q はじめてお褒めの言葉をいただいた。

A ことのついでに言えば、下一桁で、字数八字以上を全部（8）で現わしちゃうというところがミソだね。十字以上あつたら、五桁をはみ出すことになるけど、どうするつもりかと、初めは心配した。考えてみりゃあ、印文で八字を越えるやつはごく少ない。一まとめにしたいほうがむしろ扱いやすいってわけだ。

Q 重ねがさねのご褒詞に感激。感激のあまりに、恥を忘れ、（絵引き索引）数字五桁を覚える三十一文字なる腰折れを御披露させていただく気になった。短く（五桁和歌）とか（DUDEN和歌）とでも呼んで愛唱されんことを、作者としては、熱望する次第で、ある。されば  
第一は陰陽 二は形 三は枠 四五が行と字 数のままなり  
いかが。

A ざれ歌までついに飛び出した。もう、この辺でおひらきといたしましよう。

Q ひとの科白を奪うな。どうやら〔絵引き式蔵書印索引〕はものになる、というお墨付きが出たようです。

A 冗談はぬきにして、本当のところはどうなのか、反響が気になるね。

（付記） 本稿は、昭和六十、六十一年度科学研究費による「国文学文献資料を中心とした蔵書印の〔絵引き式索引〕の作成をめざす研究」（課題番号六〇五四〇〇五四）の成果の一端を発表したものである。

01024

重野 安繹



山科 師言



内藤 湖南



(同)



宮島清一郎



醍醐 忠順



松浦 静山



子孫永宝

01025

竹添 光鴻



藤虎印信

01028

中川 得楼



01022

戸川 浜男



森 大狂



内藤 湖南



賓南

藤虎

01023

内藤 湖南



宝馬齋

(同)



宝詩移

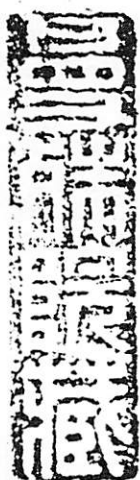
(同)



宝郵移

02014

曼殊院



01124

内藤 湖南



01035

渡辺 刀水



02013

松田雪柯



01036

三井 高堅



木村 毅



02026

吉田聆濤閣



宮島清一郎



養浩堂

幸田 成友



家在六甲山下

02028

高野 辰之



相国寺長得院



鷹司 家



楊梅公府圖書

10018

島田翰字彦植精力所聚

島田  
翰

10000



白石  
村治

02035

松山藩久松家



10015

西明寺

平等院王院

03022

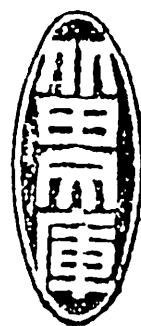
松田  
雪柯

雪柯



04014  
04114

北田  
紫水



10028

島田 翰

先子所訓母氏所  
誨并二夫子所教

11111

藤園堂



荻野 清



11112

星野 麦人



細野 要斎



宮沢 雲山



11122

内藤 湖南



(同)



(同)



勝峰 晋風



松田 雪柯



岸 伝平



戸川 浜男



賀南

内藤 湖南



11123

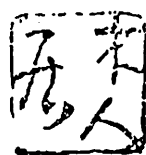
中川 得楼



反町 茂雄



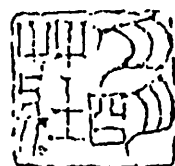
長曾我部木人



吉村 伯琳



反町 茂雄



11124

渡辺 綱也



北浦 定政



三井 高堅



聴水所集

醍醐 忠順



岡田利兵衛



細野 要齋



西村 天囚



渋谷 栄一



和田 万吉

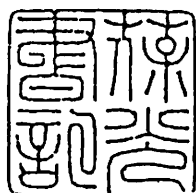


三井 高堅



双龍鑑蔵

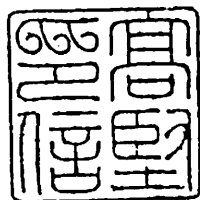
三田 葆光



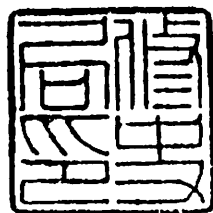
尊經閣



三井 高堅

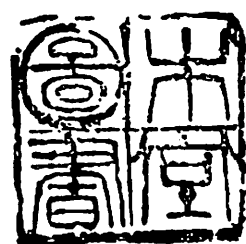


内閣臨時修史局





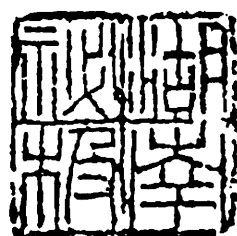
犬養 木堂



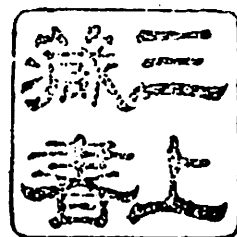
小槻 家



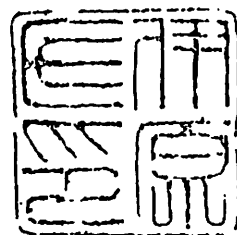
内藤 湖南



三上 参次



伊原青々園



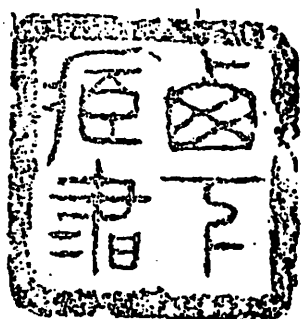
野崎 左文



上野 精一



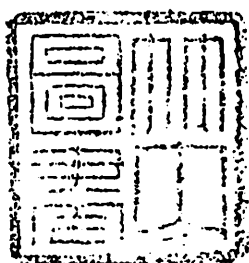
西下 経一



堀 直登



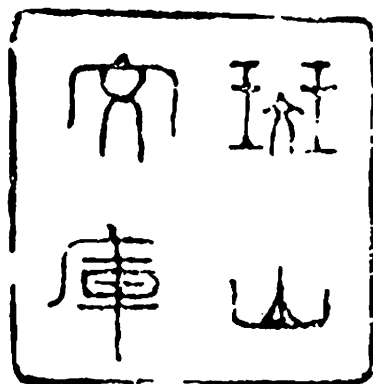
竹内 栖鳳



本居 家



高野 辰之



氷川神社

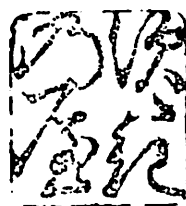


11125

稲田 福堂

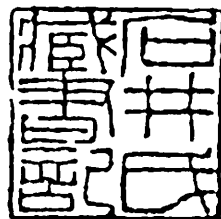


和田 万吉



11126

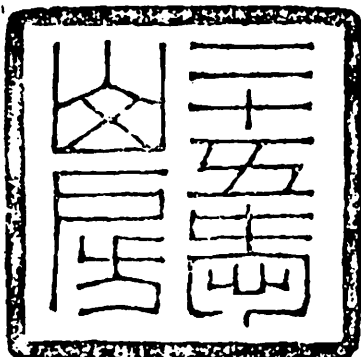
石井 光雄



鴨 脚家



中川 得楼



11128

伊東 玄朴



11135

大島雅太郎



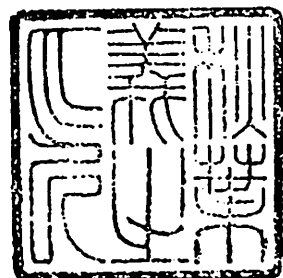
辰野 隆



宇野 明霞



秋葉 義之



11136

中川 得樓



正宗 敦夫



川喜多久太夫



伊勢丹波氏記



伊藤篤太郎

11137

江沢 梅逸

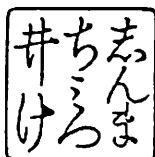


11138

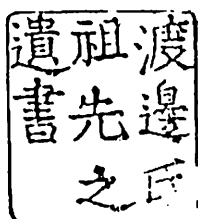
中川 得樓



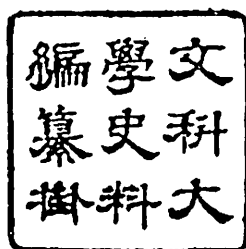
三井 高堅



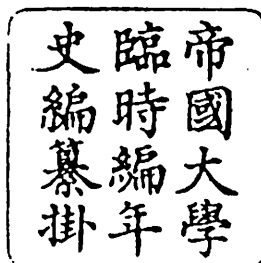
渡辺 弘堂



史料編纂所



(同)



多度津藩京極家



11191

丁(卯)



三井 高堅

11148

三井 高堅



聴永壬戌以後所集旧聚古鈔

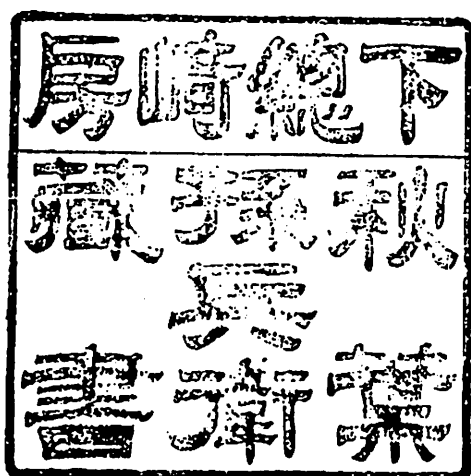
11193

長曾我部木人



11198

秋葉 義之



11224

堀 直格



寺田 望南



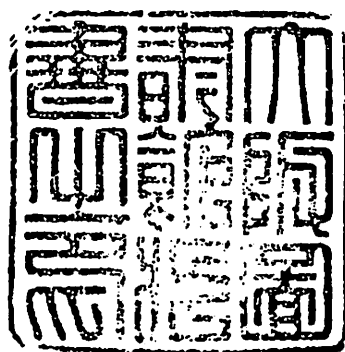
奥野 彦六



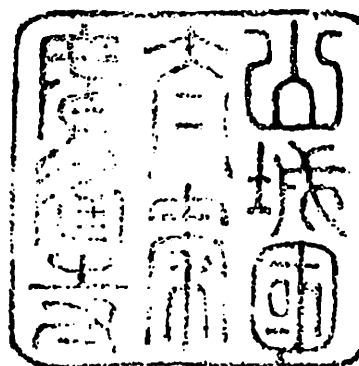
内田天正堂



大阪図書館



広隆寺





三井 高堅

1 2 1 1 2



伊原青々園



内藤 湖南



細野 要齋



福田 福堂



内野 蛟亭

宮沢 雲山

橘 寺



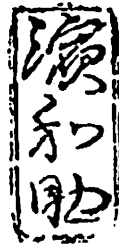
1 2 1 1 3

反町 茂雄

(同)

浜 和助

藤園 堂

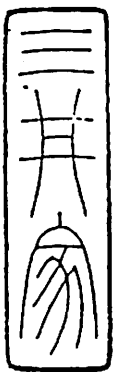


岩下 桜園

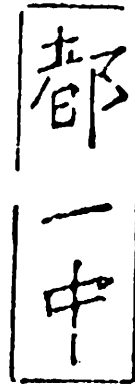
松田 雪柯

三井 高辰

(同)



都 一中



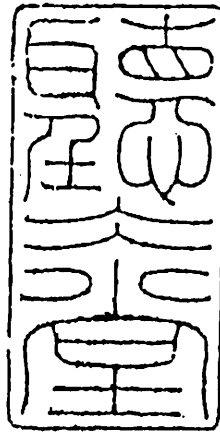
和田 万吉



志度 寺



三井 高堅



聴永堂

12114

西村 天囚



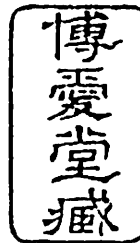
碩園珍藏

伊佐早 謙



林泉文庫

長谷川延年



建仁寺黄龍窟



竹内 篁園



和田維四郎



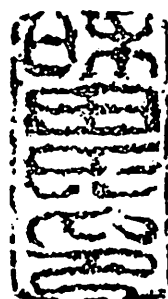
雲邨文庫

黒本 植



衆白堂藏

和田 万吉



内野 皎亭



羽間 文庫



間部 詮勝



中村 直勝

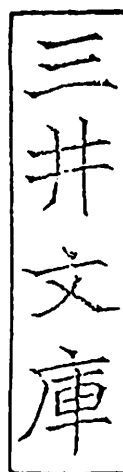


双柏文庫

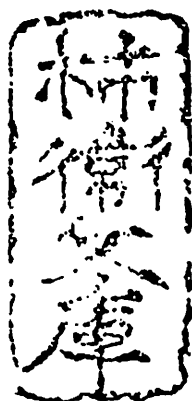
内藤 忠明



三井 文庫



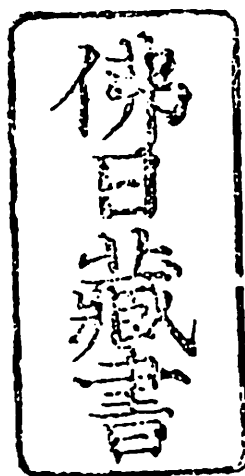
岡田利兵衛



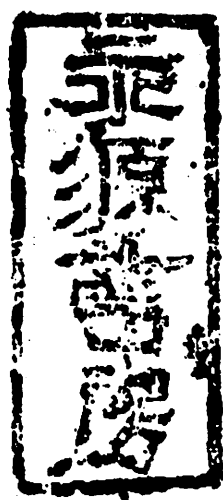
待鳥清九郎



円覚寺仏日庵



永源寺



12115

内藤 湖南

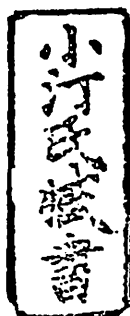


天壤間弧本

石井 光雄



小汀 利得



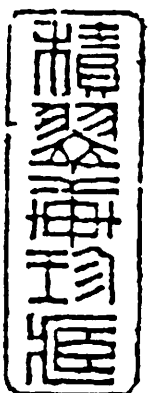
妙心寺退藏院



藤波 家

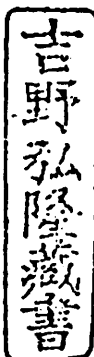


石井 光雄



12116

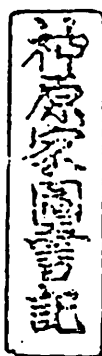
吉野 弘隆



岡田利兵衛



神原 甚造

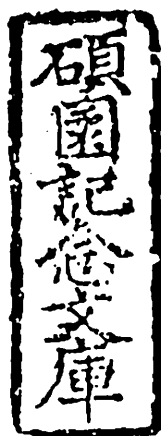




黒川 真道



懷徳堂



辻 善之助



三井 高堅

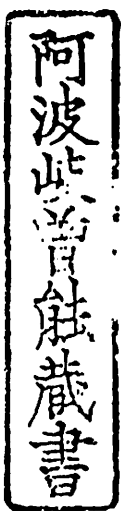


(同)



12117

大津 立嘉

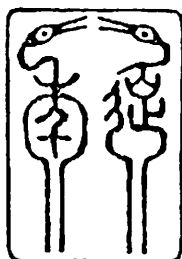


12122

伊原青々園



長谷川延年



延年

12124

内藤 湖南



長谷川延年



博愛図許

細野 要齋

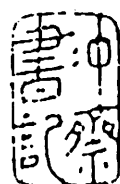


戸川 浜男

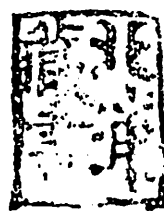


賓南過眼

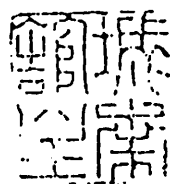
伊東 玄朴



北浦 定政



鷹司 家



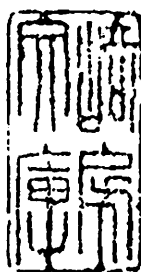
住 吉 家



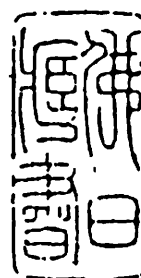
森 立之



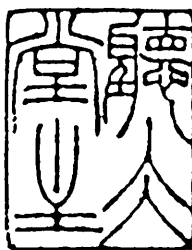
秋葉 義之



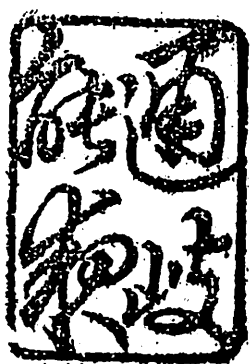
円覺寺仏日庵



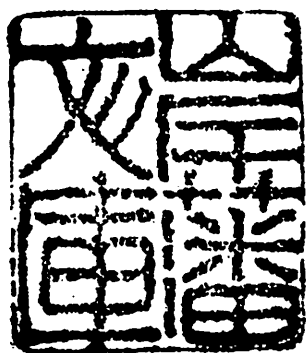
三井 高堅



内藤 忠明



岸和田藩岡部家



茂木 充実



12126

阪 正臣



中山 蘭渚



内藤 湖南



猪熊 信男



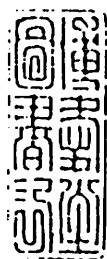
横尾勇之助



恩頼堂文庫記

珍書僧文行堂

長谷川延年

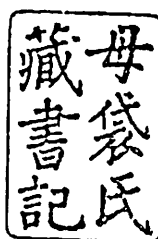


(同)

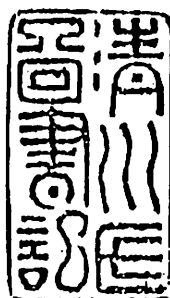


楓洞架蔵之記

母袋 光雄



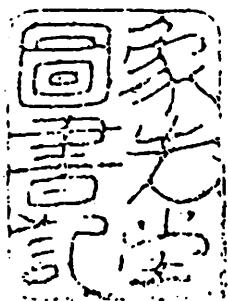
清川 玄道



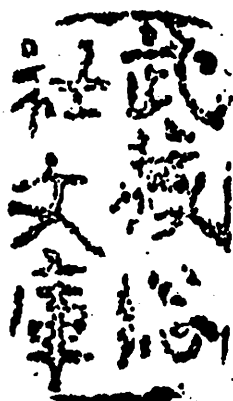
松井 簡治



伊東 玄朴

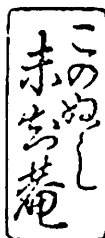


大國魂神社



12127

母袋 光雄



12128

伊佐早 謙



伊佐早謙古書之宝

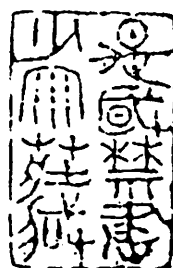
杉浦 丘園



伊藤 松宇

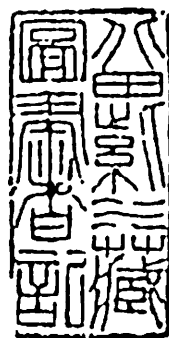


斎藤 昌三

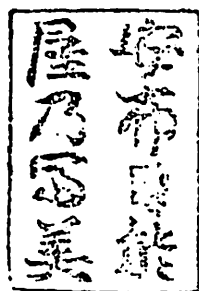


是国禁書少雨莊藏

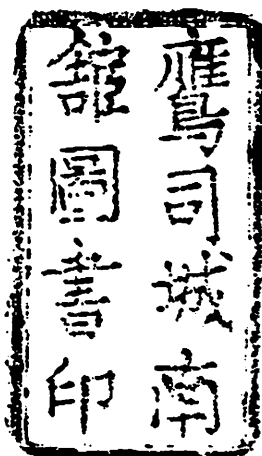
北田 紫水



六人部是香

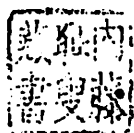


鷹司 家



12136

内藤 耻叟

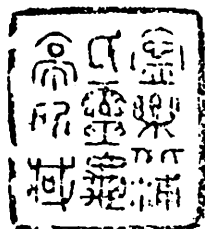


松川 半山



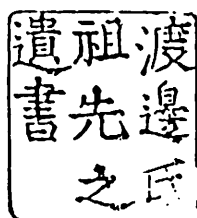
12138

北浦 定政

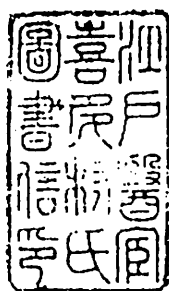


寧樂北浦氏靈龜亭所藏

渡辺 弘堂



喜多村 槐園

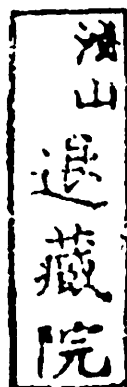


林崎 文庫

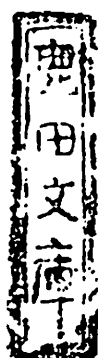
天明四年甲辰八月吉日奉納  
皇太神宮林崎文庫以顯不朽  
京都勤思堂村井古巖敬裁拜

12195

妙心寺退藏院



鹿田 静七



江藤 正澄



滝田 貞治

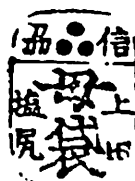


小汀 利得



12198

母袋 光雄



神田喜一郎



12213

都 一中



姫路藩松平家



12214

伊藤 松宇



高木 利太



小汀 利得

小汀文庫

浜口 惠璋

梧陰文庫

森 繁夫

小竹國文庫

加藤 直種

芳宜園奇賞

西明 寺

平等心王院

12215

静嘉堂文庫

静嘉堂藏書

長谷川延年

長谷河文庫

堀

直登

萬廻家文庫

13114



鹿島 則文

12228



大橋 訥庵

12216



高橋 太華

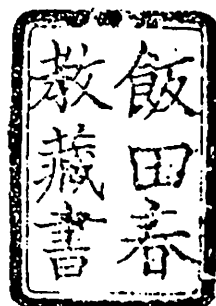
13122



幸田 露伴

露伴

12226



飯田 春教

13124

月様珍玩



中川 得樓



内藤 耻叟



(同)

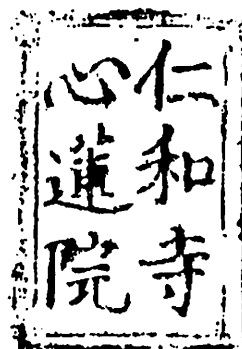


黒川 真頼

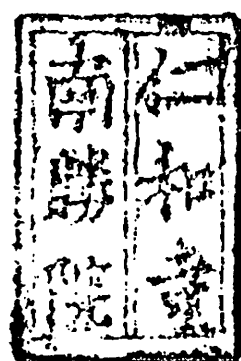


増上寺

仁和寺心蓮院



仁和寺南勝院



14137

松浦 詮



松浦伯爵家蔵書

14124

松井 簡治



13194

高野 辰之



13222

上村 観光



義安

14197

浅草寺



金龍山中歌仙庵

14125

中川 得桜



14126

岡了節



節齋書庫之印

13224

北田 紫水



14198

母袋 光雄



14112

白石 村治



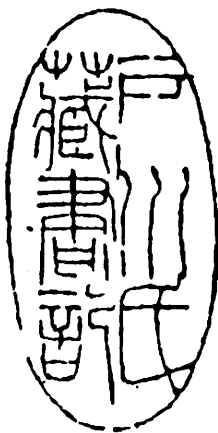
吉田聆濤閣



吉・敬





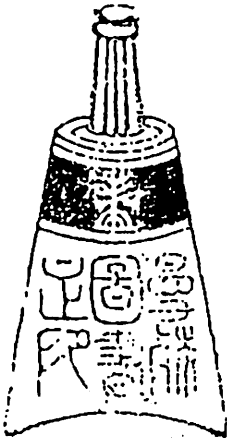



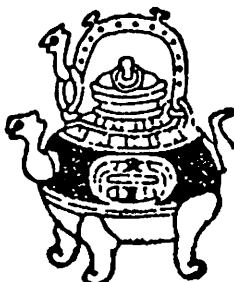

14212

小津 桂窓



戸川 浜男



<p>15322</p>  <p>雲 如</p>	<p>15124</p>  <p>内藤 耻叟</p>	<p>14224</p>  <p>齋藤 雀志</p>  <p>三井 高堅</p>
<p>15336</p>  <p>曼殊院</p> <p>曼殊圖書之印</p>	<p>15193</p>  <p>小汀 利得</p>	<p>15113</p>  <p>内藤 忠明</p>
<p>25022</p>  <p>黒板 勝美</p> <p>心庵</p>	<p>15300</p>  <p>白石 村治</p>	<p>15123</p>  <p>佐々 醒雪</p>